

涙の祈り—サムエルの誕生

【聖書】サムエル記上1章1～28節

1:1 エフライムの山地ラマタイム・ツォフィムに一人の男がいた。名をエルカナといい、その家系をさかのぼると、エロハム、エリフ、トフ、エフライム人のツフに至る。1:2 エルカナには二人の妻があった。一人はハンナ、もう一人はペニナで、ペニナには子供があったが、ハンナには子供がなかった。1:3 エルカナは毎年自分の町からシロに上り、万軍の主を礼拝し、いけにえをささげていた。シロには、エリの二人の息子ホフニとピネハスがあり、祭司として主に仕えていた。1:4 いけにえをささげる日には、エルカナは妻ペニナとその息子たち、娘たちにそれぞれの分け前を与え、1:5 ハンナには一人分を与えた。彼はハンナを愛していたが、主はハンナの胎を閉ざしておられた。1:6 彼女を敵と見るペニナは、主が子供をお授けにならないことでハンナを思い悩ませ、苦しめた。1:7 毎年このようにして、ハンナが主の家に上るたびに、彼女はペニナのことで苦しんだ。今度もハンナは泣いて、何も食べようとしなかった。1:8 夫エルカナはハンナに言った。「ハンナよ、なぜ泣くのか。なぜ食べないのか。なぜふさぎ込んでいるのか。このわたしは、あなたにとって十人の息子にもまさるではないか。」1:9 さて、シロでのいけにえの食事が終わり、ハンナは立ち上がった。祭司エリは主の神殿の柱に近い席に着いていた。1:10 ハンナは悩み嘆いて主に祈り、激しく泣いた。1:11 そして、誓いを立てて言った。「万軍の主よ、はしための苦しみを御覧ください。はしために御心を留め、忘れることなく、男の子をお授けくださいますなら、その子の一生を主にささげし、その子の頭には決してかみそりを当てません。」1:12 ハンナが主の御前であまりにも長く祈っているのを、エリは彼女の口もとを注意して見た。1:13 ハンナは心のうちで祈っていて、唇は動いていたが声は聞こえなかった。エリは彼女が酒に酔っているのだと思い、1:14 彼女に言った。「いつまで酔っているのか。酔いをさましてきなさい。」1:15 ハンナは答えた。「いいえ、祭司様、違います。わたしは深い悩みを持った女です。ぶどう酒も強い酒も飲んでおりません。ただ、主の御前に心からの願いを注ぎ出しておりました。1:16 はしためを墮落した女だと誤解なさらないでください。今まで祈っていたのは、訴えたいこと、苦しいことが多くあるからです。」そこでエリは、1:17 「安心して帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの乞い願うことをかなえてくださるよう」と答えた。1:18 ハンナは、「はしためが御厚意を得ますように」と言ってそこを離れた。それから食事をしたが、彼女の表情はもはや前のようではなかった。1:19 一家は朝早く起きて主の御前で礼拝し、ラマにある自分たちの家に帰って行った。エルカナは妻ハンナを知った。主は彼女を御心に留められ、1:20 ハンナは身ごもり、月が満ちて男の子を産んだ。主に願って得た子供なので、その名をサムエル（その名は神）と名付けた。1:21 さて、夫エルカナが家族と共に年ごとのいけにえと自分の満願の献げ物を主にささげるために上って行こうとしたとき、1:22 ハンナは行こうとせず、夫に言った。「この子が乳離れしてから、一緒に主の御顔を仰ぎに行きます。そこにこの子をいつまでもとどませましょう。」1:23 夫エルカナは妻に言った。「あなたがよいと思うようにしなさい。この子が乳離れするまで待つがよい。主がそのことを成就してくださるよう。」ハンナはとどまって子に乳を与え、乳離れするまで育てた。1:24 乳離れした後、ハンナは三歳の雄牛一頭、麦粉を一エファ、ぶどう酒の革袋を一つ携え、その子を連れてシロの主の家に上って行った。この子は幼子にすぎなかったが、1:25 人々は雄牛を屠り、その子をエリのもとに連れて行った。1:26 ハンナは言った。「祭司様、あなたは生きておられます。わたしは、ここであなたのそばに立って主に祈っていたあの女です。1:27 わたしはこの子を授かるようにと祈り、主はわたしが願ったことをかなえてくださいました。1:28 わたしは、この子を主にゆだねます。この子は生涯、主にゆだねられた者です。」彼らはそこで主を礼拝した。

【序】重い課題

去る5月21日の朝、富山県小杉町のパキスタン人の店の周りに、破られた「コーラン」がまき散らされていました。自分たちが神聖なものとして大事にしている聖典をこのように扱われたことに憤慨して、全国からイスラム教徒250人が富山に集まり抗議しているという報道が朝日新聞の社会面に写真入りで大きくでていました。

恐らくパキスタン人かイスラム教徒に対する嫌悪感からの嫌がらせでしょう。でも日本以外の地でこんなことをしたら、その地域の日本人が皆民衆の怒りにさらされるでしょう。殺されるでしょう。そのように大変なことをしたのだということを、やった本人は知っているのでしょうか。

「イスラム教徒は人類の大切な大石仏像を破壊したではないか、なに言ってんだ」と言う思いが日本人のなかにはあると思います。でも自分たちがしたことは言わず、されたことに怒り狂う——残

念ですがそれが人間の現実です。だから相手がどうであれ、その人が大事にしているものに敬意を払う心を持つことは、平和の大切な条件ではないでしょうか。

交通や通信の発達で世界は小さくなりました。国際化とかグローバル化とかがよく言われます。日本に暮らす外国人もどんどん増えています。でもこんなことが起こるようでは、日本人にとってその道のりはまだまだ遠いですね。「文化や宗教が違う者同士がどのようにしたら共に生きていけるか」という課題をいつも深く考えながら生きていかなければなりません。

四月から月一回聖書研究会が始まりました。サムエル記を読み始めました。エジプトを脱出したイスラエルの民が、カナンに定住し、王国を建設した歴史ですが、まさに「違う者がどうしたら共に生きていけるか」という重い課題を考えさせられます。シンガポールで読むところに、意味があると思います。水曜の夜なので出たくても出られない方が多いので、私の説教でお分ちしていただくことにします。

[1] 涙を流す日々

サムエルがサウルをイスラエルの最初の王に任命したのは紀元前1020年頃です。日本の最初の歴史書と言われる古事記 日本書紀によれば、第一代神武天皇の即位は紀元前660年頃ですから、それより560年古いこととなります。

イスラエルの歴史には、王制が始まる前に、モーセに率いられてエジプトを脱出した民が、ヨシュアに率いられてカナンの地に入って定住し、それから士師記の時代がありました。サムエルは士師記の時代から王制の時代へと移るにあたって、重要な役割を果たした人物です。

当時、十戒の記された板を納めた「神の箱」はシロ(エルサレムの北30数キロ)に置かれ、祭司エリが仕えていました。敬虔な人たちは毎年全国各地からシロに上って来て、いけにえを捧げて礼拝し、会食して帰っていきました。エルカナも家族を連れて毎年礼拝に来ました。

エルカナは妻のハンナを愛していましたが、子供ができないので、もう一人ペニナを妻にし子供を幾人もつくりました。子供ができないのはその人の罪に対する神の裁きだと考えられていたので、ハンナと張り合うペニナはその点について、ハンナを苦しめました。ですから家族全員が一緒になる神殿での会食は、ハンナにとってとてもつらい時でした。この苦しみが毎年繰り返されるうちに、彼女は食事が喉に通らなくなっていました。

泣いて何も食べようとしないハンナに夫のエルカナは言いました。「ハンナよ、なぜ泣くのか。なぜ食べないのか。なぜふさぎ込んでいるのか。このわたしは、あなたにとって十人の息子にもまさるではないか。」夫の自分がちゃんと愛しているんだから、それでいいではないかと言うのです。ある人が、なんと無神経な言葉だろうと憤慨しています。

確かに鈍感です。でも私にも同じ様な鈍感さがありますので、エルカナを批判できません。夫の助けを得られないハンナは、神殿に行き、神さまに自分の心を注ぎだして訴えました。あまりにも長く祈っていたので、祭司エリに酒に酔っているのではないかと誤解され、注意されてしまいました。

「いいえ、祭司様、違います。わたしは深い悩みを持った女です。——今まで祈っていたのは、訴えたいこと、苦しいことが多くあるからです」。「安心して帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの乞い願うことをかなえてくださるように」。ハンナは自分の悩みをエリに説明していませんから、エリはハンナの祈りの内容を知りません。でもこの女性がこれほど懸命に祈ったのだから、神さまは十分におわかりになっている、必ずお答えくださるに違いないと確信したのでした。

エリの言葉を聞いて、ハンナは平安な心を得ました。「彼女の表情はもはや前のようではなかった」とあります。「私の祈りは神さまにとどいた。神さまは私の悩みを知っていてくださる」という確信が得られたら、私たちの心は変化します。不思議なことに、平安が与えられるのです。

私たちの知恵はごく限られています。今夜何が起こるかも知りません。しかし神さまは先の先、また広く世界を見ておられます。何でもお出来になるお方です。そして私たちを救おうとしておられます。私は見捨てられた独りぼっちではない、神さまに顧みられているのです。後は神さまを信じて待っていれば良いのです。

人生のよい助け手として神さまが与えてくださった夫婦であっても、ハンナのように深い悲しみと孤独に沈む時があります。誰からの理解や協力も得られない、むしろ悪意を向けられるという時が人生にはあるものです。しかし人の間に理解者や協力者を見出せなくても、心を注ぎだして祈り訴える神さまを持っている人は、何と幸いでしょうか。

フランスの作家ボヴェーは「神さまに全幅の信頼を寄せることを我が子に与えることが出来た母親は、自分の人生の役割を全うしている。」と語っています。ハンナは神さまから、まさしくそのような母親になれると認められて、大切な役割を担うサムエルを産むことになったのでした。涙を流すつらい日々が、彼女にそのような信仰をもたらしたのでした。

[2] 主にゆだねます

ハンナは子供を与えられました。乳離れするまで心をこめて育てました。それからサムエルをシロに連れて行き、祭司エリの手へ委ねました。「わたしはこの子を授かるようにと祈り、主はわたしが願ったことをかなえてくださいました。わたしは、この子を主にゆだねます。この子は生涯、主にゆだねられた者です。」

この子を主にゆだねます——口語訳「主にささげます」。新改訳「主にお渡しします」。KJV(欽定訳)「Therefore also I have lent him to the Lord; as long as he liveth he shall be lent to the Lord.」。ヒブル語では「願う」も「ゆだねる」も「シャーアル」という同じ語幹を持つ動詞で「願う」の使役形が

新共同訳では「ゆだねる」と訳されました。すなはち「彼に願い求めさせる」から「彼に借りさせる」「私は彼に貸してやる」となります。だから KJV は”lend”という語を使ったのでしょう。この「貸す」「借りる」のニュアンスは、「ささげます」「お渡しします」より、「ゆだねます」の訳の方が、よく汲み取っているのではないのでしょうか。

ハンナは「男の子をお授けください」と祈り求めました。そして神さまからサムエルをいただいたのです。サムエルはまぎれもなく彼女のものです。でも彼女はその子の一生を、神さまの御用にあたる人としてささげると約束しました。ですから神さまの手にゆだねると申し出たのです。

貸すのなら、取り戻すことができます。献げたことにはならないではないかという人もいるでしょう。でも彼女は「一生」「生涯」という言葉をそえています。ここにサムエルを我が子としていとおしみ、抱きしめる母の思いと、生涯を神さまの御用に仕える人として献げなければと思う信仰とが、一つになっている心を見る思いがいたします。

木曜の The Straits Time に、きれいな14才のインド人娘の写真が載っていました。彼女は S\$800 と引き換えにアラブ人と結婚させられました。でも10日後に夫は彼女をボンベイの売春宿に売り飛ばしました。そして幸いにも警察に助け出されたそうです。親は貧しさのために、我が子を売ったのでしょうか。今アフリカで子供たちが売買されていると新聞によく報道されています。結局子供も女も親や男の所有物なのですね。でも豊かなシンガポールや日本でも子供が親の思い通りに扱われていませんか。

どのように子離れしていくかに親の資質が問われています。何時どのような形で我が子を手放していくのか。親としての本当の聡明さを神さまに祈り求めていきましょう。ハンナは乳離れするとすぐに、エリの手サムエルをゆだねました。愛情が薄かったのでしょうか。2章18～19節にこうあります。「サムエルは、亜麻布のエフォドを着て、下働きとして主の御前に仕えていた。母は彼のために小さな上着を縫い、毎年、夫と一緒に年ごとのいけにえをささげに上って来るとき、それを届けた。」とあります。幼い我が子の成長を片時も忘れずに思いやっている母の心が伝わってきます。

「わたしは、この子を主にゆだねます。この子は生涯、主にゆだねられた者です」。このように言える母親の信仰が、生涯にわたるサムエルの偉大な働きを生み出しました。世の親が皆このように言えたら、どんなに素晴らしいことでしょう。我が子を神さまにお貸しする、一生お貸しするというハンナの心を、私たちもお手本にしたいものです。

[結] 苦しみはむくられる

涙を流すつらい日々がハンナの信仰を育みました。災いと思われたことが、実は恵みの温床だったのです。貝の涙が美しい真珠を育てていくのと同じです。涙の預言者といわれたエレミヤはこう語っています。

「主はこう言われる。泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみはむくいられる、と主は言われる。息子たちは敵の国から帰って来る。あなたの未来には希望がある、と主は言われる」(エレミヤ31:16～17)。

あなたの苦しみはむくいられる。あなたの未来には希望がある。——そうです。ハンナがその御言葉を身をもってあかしています。神さまが私たちの一步一步を定め、御旨にかなう道を備えてくださいます。主が必ず私たちの心の願いをかなえてくださるのですから、自分の一切をおゆだねして、神さまの御心にかなうことに励んでいきましょう(詩篇37:3～4、23～24)。

ハンナは大事なサムエルを祭司エリに託しました。面白いことには、エリは自分の息子どもを我が俤などら息子にしてしまいましたが、サムエルの方は立派に育てています。その事については次回に学びます。ハンナはエリの息子たちの悪い評判を聞いていたに違いありません。にもかかわらずサムエルをエリに託しました。ここにもハンナの信仰の素晴らしさが見られます。

ハンナは神殿で心を注いで祈りました。エリに誤解されて注意された時、彼女はエリに自分の悩みや祈りを詳しく語っていません。彼女はひたすら神さまにのみ向かっていったのです。ですから神さまとお約束したことを、神さまに果たそうとしました。彼女は我が子を神さまにゆだねたのです。その点でいささかの迷いもみられません。これもまた見事です。

私たちが神さまを信じることに徹して、我が子を神さまにおゆだねしてまいりましょう。神さまはいろいろな人をお用にになります。人は皆なにがしかの欠陥を持ち合わせています。でも神さまに用いられる時、失敗親父のエリが立派に役割を果たしました。要は私が神さまに全幅の信頼を寄せることです。

信頼に足る人がいないから我が子を託せないのではありません。信仰が足りないから、子離れ出来ないのではないのでしょうか。ハンナの信仰を持ちたいものです。主にゆだねる信仰に徹して、我が子を神さまのお役に立つ人に育てていただきましょう。

「安心して帰りなさい。イスラエルの神があなたの乞い願うことをかなえてくださるように」。この言葉は、ひとりハンナや母たちに対して語られたものではありません。全ての者へのお言葉です。イエスキリストも繰り返し語られました。「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」。

私たちは今日も礼拝を捧げました。私たちの祈りは神さまに届きました。イエスキリストは「安心して行きなさい」というお言葉をもって私たちを送り出してくださいます。苦しみはむくいられます。未来には希望があるのです。平安と希望をいだいて、各自の生活の場に戻っていきましょう。

祝福が豊かに在りますように。